

但馬の蝶雑記

広畑政己

兵庫県下の蝶の分布については長年の調査の累積によって、ほぼその概要がまとまりかけている。しかし、種ごとに記録を整理していると「たぶんそこにはいると思うが、そう言われてみると採集記録がない」という場所がずいぶん多いことに気付く。また、食餌植物などについても、他府県の例にならって「当県でもたぶんそうだろう」と片付けられていることも多いのではないだろうか。

そのようなわけでここに報告するのも、「なんだこの程度のことで」ということばかりであるが、当地域の記録として残しておいた方がよいと考え、誌面をこのつたない報文で汚すのもどうかと思いながら発表させていただいた。この小文を草するにあたり、近藤伸一氏並びに播磨蝶友会の方々には何かと御協力いただいた。ここに記して御礼申し上げる。

1. メスアカミドリシジミについての知見

1984年5月20日、山東町与布土にて本種の幼虫を得ている。幼虫は葉の裏にいたもの、ソメイヨシノの樹上から降りてくるもの、前蛹になっているものなどいろいろであった。前蛹は、樹の根元の樹皮裏や裂け目、樹に巻きついたツタと樹の間、根ぎわの枯葉の裏で見られた。これらの習性は周知の通りで今さらの感はあるあるが、県下での記録として、また、蛹化時期の資料として残しておきたい。

本種は主として北西部の産地に多く見られ、北東部は記録も少ない。山東町ではこれが初記録と思われる。当地域では、朝来町の奥多々良木と並ぶ西限の記録でもある。山東町与布土の産地は標高は約300mで、県下では400～700mに生息地が多いようであるが、最近発見された福崎町田口の160mの記録は例外としても、与布土のように300mの低標高地でも産地が多く見つかっているので、今後の調査が望まれる。

なお、同日同地において、ヒメキマダラヒカゲの終齢幼虫2頭と蛹1頭をクマザサの葉裏で確認している。また、ミスジチョウの終齢幼虫も1頭採集しているので併せて報告しておく。

2. 和田山町三波で採集した蝶

1984年5月20日に三波にて、オオミドリシジミの幼虫1頭をコナラより採集している。本種の分布は広いようでありながら、採集記録をあたってみるとその産地は思いのほか少ない。当地でもこれまで記録がないようである。

このほかに、コナラよりアカシジミの幼虫を、ススキよりキマダラセセリとヒメジャノメの幼虫を得ている。他にスジグロシロチョウ、サトキマダラヒカゲ、ヒメウラナミジャノメを採集している。

3. 村岡町小城のゼフィルス

1983年12月4日に、小城にてゼフィルス数種の卵を採集した。民家のある標高600mあたりの山麓から小城越にかけてはミズナラやブナの樹林が残っており、沢沿いにはウラジロガシも生育している。

採集できた種はフジミドリシジミ、アイノミドリシジミ、ジョウザンミドリシジミ、エゾミドリシジミ、ミズイロオナガシジミの5種で、ジョウザンミドリシジミが多く、他は少ない。沢沿いのウラジロガシも探したが、ヒサマツミドリシジミは発見できなかった。

ゼフィルス以外ではヒメキマダラヒカゲの幼虫を11頭採集している。幼虫の体長は19mmが1頭で、他は11~14mmと小さい。県下の他の地域での調査では、9~17mmの幅で幼虫が確認されているが、この度の19mmは越冬幼虫としては大きい方である。

4. ホシミスジの採集記録

古い記録になるが、1982年8月8日に関宮町関宮にて、民家の庭のユキヤナギに産卵中の本種を採集している。県下南部では庭のユキヤナギを食餌植物として分布を広げ、従来見られなかった市街地にまで達している。北部でもこのような傾向があるのだろうか。このほかに、近藤伸一氏より大屋町加保にて本種を採集したとの連絡を受けている（未発表）。

5. 関宮町葛畑8月の蝶

葛畑のスキー場はオオウラギンヒョウモンやクロシジミの産地として知られている。草原であるので生息する種は限られているが、筆者も8月には何回となく

当地を訪れ、その間、前記2種のほかに何種か採集しているので、食草など生態面も併せ、書き留めておきたい。

確認できた種はアゲハ、スジグロシロチョウ、キチョウ、ツマグロキチョウ、モンキチョウ、ルリシジミ、クロシジミ、ツバメシジミ、ヤマトシジミ、ウラギンシジミ、オオウラギンヒョウモン、オオウラギンスジヒョウモン、アカタテハ、ジャノメチョウ、ヒメウラナミジャノメ、ヤマキマダラヒカゲ、イチモンジセセリの17種を数える。

1970年代後半ではオオウラギンヒョウモンの多産地でもあったが、近年その姿は全くと言ってよいほど見られない。本種ほどではないがクロシジミも同じ傾向にあり、数年前までは多くの個体が見られたが、このところ数が激減している。そのような状況のなかにあって、個体数が毎年安定しているのはツマグロキチョウで、8月下旬には新鮮な秋型の雄が多数発生している。雄の新鮮な個体に対し、雌には夏型の汚損した個体も多く見られ、この頃が季節型の移り変わる時期に当たるのかもしれない。

ツマグロキチョウの雌を尾行していると、カワラケツメイで吸蜜したりしながら1卵ずつ産卵していくが、我々の目にふれやすい上部の葉にはあまり産卵せず、下の方にある食草の葉に産卵することが多い。また、雌が終齢幼虫にとまって、しばらく静止する行動が見られた。雄が蛹に求愛する行動は他の種で報告されているが、この度の行動は偶然なのか、このような習性があるのか定かでない。

このほかにキチョウがメドハギに、ツバメシジミがヤマハギに、モンキチョウがミヤコグサに産卵するのを観察している。また、クズからはルリシジミの幼虫とウラギンシジミの卵・幼虫を8月下旬に確認している。ウラギンシジミはこの時期にはすべてのステージで見られる。以上、8月に葛畑で見られた種について述べてみた。何かのお役にたてれば幸いである。